

は異なる特徴がある。さらにヴァニエは、「私たちとは違う存在」への恐怖というテーマを展開し、知的な障害のない者たちが、自分とはまったく異なる存在だと思っていた障害のある人たちによって、自分自身の内なる貧しさ・傷つきやすさ・弱さ・傷を暴かれ、それを受け入れ、そのうち他者の傷を受け入れられるようになることで、異なる人々がともに居ようとする「場所」が生まれると述べる。また、障害のある人たちの「貧しさ」が十字架上の受難のキリストの貧しさに類比されるが、その意義は次の二点にまとめられる。第一に、貧しさが「他者によって剥奪された状態」として想起されることで、それが個体の抱える問題ではなく他者との関わりの結果という意味を帯びる。第二に、キリストと結びつくことで、「苦しみ」から「苦しむ者」へ視点が移行し、「苦しみや死がある」のではなく「苦しむ誰かがいる」のだということが明示される。ここから、かの「苦しみや死なのだ」ということが明示される。ここから、キリストやマリアは、「具体的な苦しむ人、亡くなった人」と「その人の傍に寄り添う人」を普遍化する一者として、教皇メッセージに姿を現していたのだと考えられる。これは、「私事」をいかに語り共有するののかという、現在の欧米型社会における問題に通じている。

非欧米社会における障害者の位置づけの人類学的考察は、カトリック世界におけるこれらの言説と「社会的な交流ができる（コミュニティの一員である）ことが個人の能力よりも価値として高い」タイプの社会における言説との類似性を示唆する。またクリステヴァは、フランス啓蒙主義以降の近代社会に

「母（という体験）」の場所がないという視点を持ち込み、知的な障害を「他者性」と結びつける言説に「死」と「母」を加えることで、さらなる展開の可能性をもたらししている。

真宗文化圏域での障害者運動の可能性

—— CILだんないの研究 ——

頼 尊 恒 信

本研究は、「NPO法人CILだんない」（以下、CILだんないと略す）という、真宗文化圏域に存立する障害者自立生活センター（CIL）の思想と地域社会の関係を事例研究として、真宗文化圏域での障害当事者運動の可能性について考察するものである。同法人は、重度障害者四人が中心となり、二〇一一年四月、滋賀県長浜市木之本町地域に自立生活センターを本格的に立ち上げた。同地域の特徴として、木之本町を含む旧伊香郡地域は、真宗寺院が数多く、「講」文化や報恩講などの真宗関連の村行事が根付いており、真宗文化に基づいた村落共同体が形成されている。

CILだんないの自立生活センターは、①農村地帯にある自立生活センター、②仏教に縁深い自立生活センター、③共生生活センターと名のつく自立生活センター、④社会モデルを主軸とした自立生活センター、という、四つの地域特性を生かした特色がある。そのような自立生活センターは、ある意味で真宗文化圏域での自立生活センターのプロトタイプとなり得る。

しかしながら、問題点も数多く存在している。真宗文化は、「講」組織に代表されるように、地域社会の中で同信の人々との結びつきを大切にしてきた歴史がある。これは、アメリカの自立センターを中心とする自立生活運動の特徴である「個人主義」を基盤とした運動ではない。むしろ、「御同朋・御同行」と呼ばれるように他者との関係性を大切にした文化である。その点において、「共生生活センター」としての自立生活センターという発想は、少なくとも地域に根ざそうとしている自立生活センターであると言える。

しかしながら、郡部など地方都市になればなるほど、日本文化独自のムラ社会といわれる閉鎖性も見受けられる。その共同体を重んじる伝統的な文化の中で、自立生活センターの活動を行っていくことは、どうしても個人の権利性が不明確になる可能性を秘めている。つまり、「障害は社会が生み出したものであって、障害のある人々を障害者にしたのは社会だ」(UPIAS)というイギリス社会モデルにみられるような障害当事者の権利擁護活動が展開されにくいという土壌を持つ。そのことにより、イギリス社会モデルの主張を基軸とした自立生活センターの運営方針が伝わりにくいのが現状である。

障害当事者の権利擁護を十分に行おうとするならば、社会モデルの考え方が不可欠である。障害者の権利条約に見られるように、医学モデルや保護モデルでは、障害当事者の権利を十分に擁護出来ないということは、国際的にすでに合意形成がなされている点である。そのような中で、「共同体と個人」との関係性が不明確なままでは、権利擁護は不十分に終わってしま

う。地域共同体が崩壊せず残存している地域において、地域共同体のストレングスを残しつつ、社会モデルに基づく社会へと変革していく必要性があるが、その方法論としては、多くの課題が山積していると言わざるを得ない。

地域社会との関係性において開かれる自立生活センターの活動は、地域社会で生活する多くの人々と障害者が共に生活する中で、共に障害者運動に出会っていくきっかけを産み出すと言える。そのことが、社会自体を多文化共生型の社会に作り替える因となっていく。障害者運動も、地域の中で根を張ることにより自然と地域独自の運動へと地域化されていく。そこに、地域の社会構造や医療体制が具体的に変革されていくという側面を持ち得ている。同時に、地域に根ざした共生運動に主眼を置くことによって、障害者運動そのものもつ、革新性や自立性が失われかねないという問題性も見えてきた。そのような中で、障害者の自立と共生という二つの課題がどのように共存できるかを、今後の課題としたい。

浄土真宗本願寺派におけるビハーラ活動の意義

伊 東 秀 章

現代は科学や医療が発展し、多くの病が治療されるようになり平均寿命も伸びた。一方で、科学や医療による延命治療だけではなくクオリティオブライフを尊重するようになったのは、ホスピス運動があったからである。このホスピス運動が世界的